

連載

75 在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

橋本 満義 (65歳・内科)

番外編

在宅医療研修に来松した 女子医学生 ～知行合一の実践～

JR松山駅の改札口で待ち合わせていると、「この度は、大変お世話になります」と、しっかりと口調で社会人の表情をした、生徒にしては少し歳のいった女子学生(36歳)が現れました。

当院は、県外の某医科大学と臨床教育協力医療機関として協定しています。それで、国策である在宅医療実習(医学部6年生と卒後の研修医は必須)のため来松したのです。

一通りの在宅介護医療関連サービス内容と

実務を講義した後、いよいよ、在宅患者さん(末期がんで廃用症候群の女性・84歳)宅へ訪問することとなりました。

松山医療圏の北東へと向かう道中は天気も良く、春の心地よいそよ風が、私達を幸福感で優しく包みます。さらに奥へと進み、山肌を感じていると、患者さん宅が眼下に見えてきました。やっと到着し、坂道を登り始めた時、突然石垣から現れた大きなヘビが私達を出迎えてくれました。しっかり者と思われた女子学生は「ギャーッ」と悲鳴を上げ、在宅車に逃げ込んでしまいました。山奥の日本式家屋の場合、夏場ではムカデなど出くわすこともあり、季節と環境といった生活空間も十分に意識すべき問題なのです。

ひと呼吸おいて、患者さんの診察となりましたが、彼女は医学的な面において、そつなく優秀で、

当院で行っている患者さん中心の高度な医療と質の高い精神ケアなど、在宅医療提供内容をすぐに理解していました。その後、居宅介護支援事業所や訪問看護ステーション、訪問介護、訪問栄養指導、デイサービスセンターなど、盛りだくさんの介護医療サービス全般を急ぎ研修しました。そして、2週間の規定期間を終え、松山を後にしたのでした。

しばらくして彼女から一通の手紙が届きました。「この度の研修は、当初想像していた以上に素晴らしく、とても貴重な経験ができ、驚きと感動の連続でした。……中略……そして、患者さん中心の在宅医療を提供するスタッフの方々は心から真剣そのものでした。近い将来、皆様のように私自身も良い医療者となれるよう頑張りたいと思います。最後に、休日に松山を観光しましたが、風土も人々も優しく大好きになりました。ありがとうございました」

国(文部科学省、厚生労働省)も2025年問題(団塊の世代の高齢化)で、患者さん中心の医療教育を押し進めています。

私も医学生のころは聖人のように“性善説”の考え方で、清らかな医学生時代だったのだと思います。しかし、卒後、臨床医として経験を積むにつれ、次々と現れる難題にややもすると、世の中は“性悪説”なのではないだろうかと思い始めていました。

医師としての真の誇りや志を持ち続けるのは、孤独ではあります。ですが、今回のように、純粋な医学生と短い期間でも同行することは、何かほっとし、心身がすっかり洗い清められるような感があります。若さ、青さ、未熟さに浸ることも、たまには良いようです。

「お医者さんが来てくれる」

24時間・365日態勢で対応(松山市全域)

私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。



医師数 21名
(常勤6名、非常勤15名)

内科・外科専門医 18名
(国立がんセンター勤務歴有3名)

精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
(ペインクリニック科)

末期がん治療(緩和ケア)
相談室開設!

Hyper Blood Viscosity(高血液粘度群)を科学する
臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>